

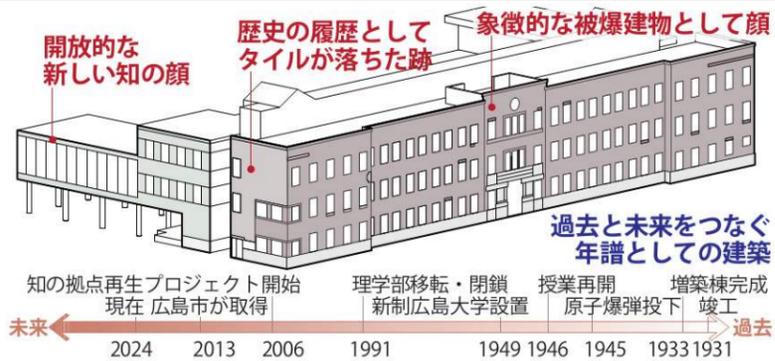


「(評価テーマ1) 被爆建物としての適切な保存」及び「(評価テーマ2) 平和に関する研究拠点等としての活用」についての提案

評価テーマ1：被爆建物としての適切な保存

1：過去から未来へつなぐ年譜としての保存～建物自身が知の拠点としての情報メディア～

保存改修にあたり旧理学部一号館を、「かつての学都広島としての歴史」～『物言わぬ証人』としての被爆建物～「未来へ向け平和を目指し知を創造する場」という過去から未来へ続く時間軸の中に位置づけます。これらの異なる位相が共存するように保存・改修を行う事で未来へ被爆の実相を伝え、平和に向かう新たな知が創出・蓄積され循環する場を目指します。

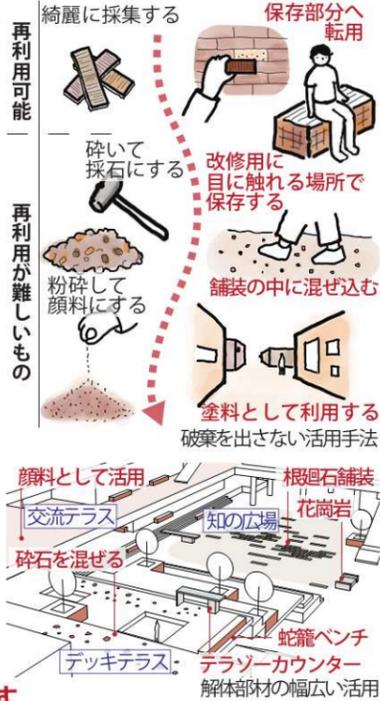


1-①：積極的な保存に向けた解体と撤去物の資料としての再生

正面部分を確実に保存するために解体部分を活用します。割れたタイルも全て活用します。「保存箇所の補強と改修のための調査」と「歴史を伝える一次資料としての保存」を行います。

保存箇所の状態を推測するための解体調査... 【構造】資料の乏しい基礎部分は、解体部を確認して補強計画につなげます。【スクラッチタイル】だんご張りの現状に合わせた撤去方法を選定するとともに、タイルの状態も精査し、活用可能なタイルの数量と活用方法を把握します。【花崗岩・擬石】経年劣化が進んでいる内外の石材による仕上げ部分は、解体部分で試験施工を行い表面処理方法の選定に役立てます。

可能な限り多く再利用可能な解体方法... 外壁タイルはウォータージェット工法により再利用できる形で躯体から剥がし、裏側のモルタルを除去した上で、保存棟の補修が必要な箇所に移設します。余った部材については、将来的な補修を想定し、敷地内で蛇籠ベンチにするなど市民の目と手に触れる形で保管します。



市民の力で保存

市民の力で保存... タイルの裏処理など安全に行える作業では、定期的な市民ワークショップ(WS)を行います。WSを行うことで、タイルの積極的な利活用、被爆建築に対するより深い理解につなげます。

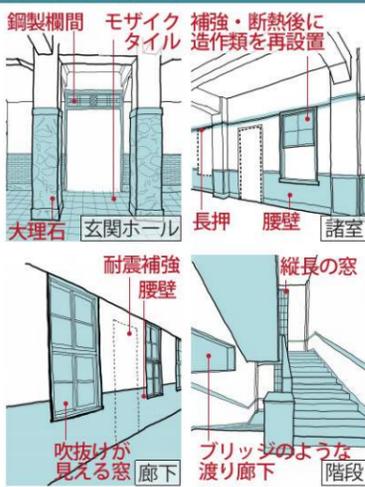
素材の状況に合わせた活用... 割れてしまったタイルは骨材として床・壁の仕上げに混ぜ込んだり、教室で使われていたテラゾーのカウンターを広場の什器にする等、破棄せず最大限活用します。

1-②：適材適所の技術によりかつての校舎の佇まいを確実に残す

多様な技術を総合的に検討し部位と状況に合わせて適切な手法を選択します。より多くのものをできるだけ現物で残すことを目指します。広い視点の配慮で、玄関ホール、廊下をはじめ、各所の雰囲気を残します。

学都広島としての歴史を継承する知の拠点となる保存部分の内観改修

【玄関ホール】柱の大理石は補修の上、撥水剤等の表面処理を行います。森戸道路側正面入口は、タイルや建具など既存の意匠を残したまま、空調管理用に室内側に自動ドアを設置します。【廊下】構造補強を室内側で行うことで、腰壁や趣のある建具は補修した上で活用し廊下の雰囲気を残します。設備メインルートを諸室側にすることで、廊下の雰囲気を損ないません。サイン計画でも配慮します。【諸室】当初の仕上げのままとされている事務室や研究室の意匠を踏襲し、学舎の雰囲気を再現します。外せる造作類は、構造補強・断熱施工後に再設置します。【階段】中央の階段の建具やブリッジ的な佇まいを活かした構成とします。両翼の階段は空間的な特徴の一つでもあり、既存建物の廊下との繋がりなど、存在感やデザインを踏襲することで、その特徴を継承します。



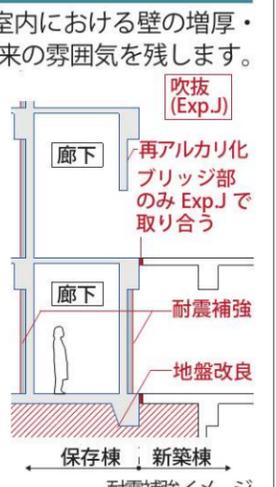
被爆の実相を伝える現況の定着。新規部材を用いない補修

【スクラッチタイル】剥落の恐れのある箇所は、アンカーピンニング工法、スラリー注入等により補強し、補修箇所は解体した校舎のタイルを再利用することで、新規でタイルを複製せず、被爆時からある現物を活用します。大きくタイルが剥離している箇所は、強化剤の塗布などにより安全性を確保の上、歴史の履歴として保存することを含め、協議しながら決定します。【玄関積柱、根廻、バルコニー】補修の上、含浸性の強化剤や撥水材などを塗布します。使用材料は解体部で試験施工を行い選定します。創建当時のバルコニー手すりは再現を含め検討します。【サッシ】既存サッシの割り付けを踏襲したアルミサッシに交換し建物の性能を確保します。既存撤去の際には、窓まわりの躯体の補修を行い漏水対策を施します。【大時計】被爆時計と同型で現広島大学理学部講義管理棟で使用されているものを参考に復元します。



耐震補強および劣化対策

【躯体】保存棟と新築棟は構造的に分けます。室内における壁の増厚・増設による補強とすることで保存棟・廊下の従来の雰囲気を残します。【新築棟との接続方法】新築棟との間には吹抜けを設けます。保存棟と新築棟の接続部はExpJを設けたブリッジ等でつなぐことでExpJの箇所が限定され、保存棟に負荷を掛けない構造とします。【基礎】ボーリング調査を行った上で必要となった場合は、建物内部から施工可能な地盤改良方法である高圧噴射攪拌工法等により、大規模掘削を行わない液状化対策を行います。【コンクリート】外壁の室内側と屋上の床梁部分等、外気に接する部分を中心に躯体のアルカリ性を回復させます。工法の選定では、既存の雰囲気を損なわないよう配慮します。



評価テーマ2：平和に関する研究拠点等としての活用

2：「知の広場」を中心とした研究・教育の交流・循環

保存棟と新築棟で囲まれた中庭に「知の広場」と「交流テラス」を設けます。研究者や市民、観光客など様々な人たちが訪れる広場からは、「教育機能・研究機能・情報発信機能」からなる多様な活動を一望することができ、新たな知が創発的に生み出され、未来へつなぐ平和の「知の循環」を作ります。



2-①：多様な研究・教育活動のきっかけとなる

周辺環境、施設に寄り添い「知の拠点」の創出に寄与する計画とします。

「ひろしま知の拠点」としての機能連携... 森戸道路の軸線の端部に知の広場を設けることで、東千田公園、東千田キャンパスと一体的なエリア形成を行います。

知の広場と連続するゾーニング計画

森戸道路と芝生広場からアクセスしやすい位置に教育機能と情報発信機能を配置し、対する南側に研究機能を配置します。

様々な活動を支える諸室の規模と配置

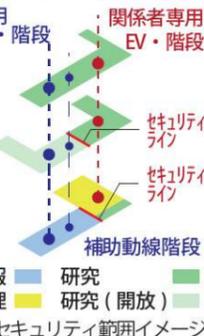
保存棟には、歴史的意匠を活かすため壁を壊さず既存の面積に合わせた用途の諸室を設置します。新築棟には、天井の高い展示室や広い講義室、積載荷重が大きい図書資料室の一部などの保存棟では適当でない規模の室を設けます。

2-②：地域に開き平和を発信する知の継承エリアをつくる

明快かつフレキシブルなセキュリティ計画を行うことで、適切に閉じつつ地域に開いた研究・交流の場とします。

安心安全なセキュリティ計画

研究・管理・情報エリアを明確にゾーニングし、それぞれに縦動線を配置します。研究エリア内では諸室の性格別にグルーピングし、多様なセキュリティ・ラインの設定を容易にします。それにより来訪者エリアと関係者エリアを変化させながらも明確に区分でき、1Fイベント時に研究エリアを一部開放する等、フレキシブルな対応が可能です。



活動の垣根を超えた交流の場

交流テラスなどが複数の活動を繋ぎ、新たな連携を促します。点在する個性的なラウンジ(キッチン・ラウンジ、パブリックビューイング・ラウンジなど)が交流のきっかけを積極的につくり出します。時には組織の垣根をこえ、市民や研究者同士が連携しやすい環境とします。活動や研究成果を発信しやすいように、発表、共有できる場を建物内外に設け、知の循環、交流を促します。

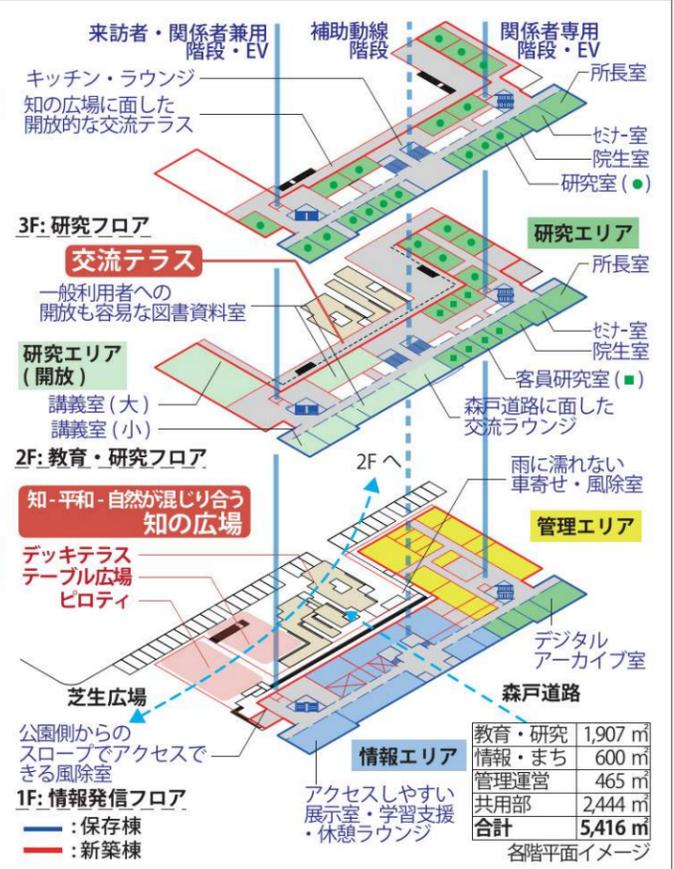


Table with 2 columns: Area Name and Area Size. Includes rows for Education/Research (1,907 m²), Information/Community (600 m²), Management/Operations (465 m²), Shared Areas (2,444 m²), and Total (5,416 m²).